

会長講演

家族とともに探索してきた

— 家族、この不思議で魅力的なるもの —

岩手県立大学 看護学部 横田 碧

『家族』。この、懐かしくもまた苦しくもある存在は、一体何なのでしょうか？

家族の中に生まれおち、家族とともに共通の空間の中で、同じ時間をともに過ごす日々を重ね、人間は何を感じ、何を思い、何を学び、記憶の中に蓄積して、成長してきたのでしょうか。

そしてまた、家族のかもし出す雰囲気を取り込み、それに反応し、自己内で思考し、それに基づいて行動していく。その結果生じた出来事から、さらに学習し、その意味を認識し、自らの言動を修正し、成長・成熟していく。そしてさらにその成果を、良くも悪くも次の世代に伝え残してゆく。

これらの人間の生活の営みは、家族を核として、また心の絆として、くりひろげられています。それは、人類が誕生して以来、連綿としてつながり、循環し、流動しているのです。

私たち看護者は、その雄大な流れの中のほんのわずか一点の時にそれも困難や危機状況の折りに、その家族と出会い、そしてかかわり、行動や言葉を通して交わり合い、かすかな、または大きな影響や痕跡を残し、そしてまた離れていくのです。

この悠久の流れの中のひとときに、我々はできることならばほんの少しでも悪しきものを減らし、良きものが生まれたならばと念願しつつ、相互交流をおこなっています。そのふれあいの過程の中に、一体何があり、そこにはどのような意味があるのかを明らかにし、少しでも関係する者すべてにとって、効果的な交流が生まれるような方法を求めて、家族看護学という理論を培おうとしてきています。

今回は私自身の人生の過程を縦糸とし、どのような実践から家族への支援の原則や方法の可能性を見出してきたかを横糸として、その集約したものを、以下の5点にわたって述べてみたいと思います。

- a) 家族の存在の仕方の多様性
- b) 家族の時間性のもたらす現在への影響
- c) 病理的な状態への予防的なかかわり
- d) さまざまな理論の活用
- e) 援助者の育成援助の方法

私の職業人生があと少しで終結しようとしている今、このような機会を頂いたことにより、自己の家族、他者の家族、そしてそれらとの出会いとかかわりを振り返り、その過程を通して、気づき、考え、学びとり、整理してきたものは何かを総括してみることにになりました。